

天海結月

yuzuki amami

frozen egg

フ
ロ
エ
ッ
ダ
ズ
！



ミシガン大学の構内で、また女子学生のレイプ事件が起きた。

アメリカ中西部にあって、東部の有名校（アイビーリーグ）と肩を並べるミシガン大学には、優秀な学生が5万人も集まっている。大学のあるアナーバーという町が、デトロイトという失業率と犯罪率の高い工業都市から車を飛ばせばわずか40分そこそこなので、大学構内（キャンパス）でこうした事件がよく発生する。

「ちょっとした町1つ分もある、350万坪にも及ぶキャンパスの広さでは、デトロイトからの犯罪者の立ち入りを防ぐ方法はないのだ」と書かれた英字新聞の記事を見た母の智子は、アグリのミシガン大学への留学を必死でとめた。

が、とうとうそのミシガン大学に、アグリはやってきた。

程度の高いミシガン大学で、留学生が2年で修士号を取るなんて絶対無理よ、とみんなに言われてはいたが、アグリは必ずやって見せると母に豪語して出てきた。

確かにMBA（経営修士）ランキングで、ウィートン大、ノースウェスタン大、シカゴ大に次いで、全米4番目というミシガン大学の2年間で、外国人でMBAをとることは生易しくはないだろうことをアグリは十分承知していた。

しかし「MBAをミシガン大で2年間で必ずとる」との母との約束を果たさない限りは、永久に母を超えられないのだから、死に物狂いで頑張るしかない、とアグリは自分に言い聞かせていた。他人の誰にも学業においてひけを取らないと自負しているアグリではあったが、学業成績超抜群の学生生活を送り、いまや津田塾の次期学長候補かと噂がある母の智子は、同性として超えねばならぬ目標であった。

高校で一夏、ホームステをし、大学の1年間をイリノイ大学に留学していたアグリには、英語が外国語であるという感じも薄くなっていた。つまり、完全に日本語を使わないで毎日を生生活することに抵抗がなくなっていた。

留学生の面倒を見てくれる大学で用意された課の厄介にはならずに、自分で住まいも決めていこう、とアグリはアナーバー到着早々ルームメイト探しの掲示板の前に立った。

日本人のルームメイト求む。ただし、英語を教えるつもりなし。

当方日本育ちのヘンナ外人。バスケット歴のある6フィートの

博士課程大学院生。211-3654 ギール

こんな広告に目が止まった。

一面白い広告だな、なかなかいかしているセンス。しかもきれいな活字体の日本語が書けるんだー

アグリはギールという子に電話をして、条件を聞いてみようと思った。しかし、もしこの子とルームメイトになったら、弥次喜多だろうナと可笑しさがこみ上げてきて1人でニヤニヤしてしまった。180センチもあるギールに対して、アグリは150センチにも足りないという、日本人の中でも小柄であったのだ。

「わたし、隠しときたくないから言うけど、レズビアンよ。いい？」

最初にゲイルに会ったときにこう言われた。

「じゃ、あなたパートナーを募集中ってわけなの！」

「ううん。目下失恋後遺症治療中だから、あなた次第ね。あなたが異性愛者(ストレート)なら襲ったりしないからご心配なく。でもルームメイトがいないと経済的にやってけないのよ。いやじゃなかったら一緒に住まない。私英語の出来ない日本人世話するのいやなの。あなたなら日本語でも英語でも話せるから、いいルームメイトだわ」

正直で、さばさばした気性のゲイルが気に入って、アグリはルームメイトになった。

実は、カトリックの女子高に行っていたある時期、アグリはレズビアン(レズ)の洗礼を受けていた。のめり込むというほどではなかったが、結構楽しんでた。もし、母親の智子が勘付いて大騒ぎをして父親に尾行させたり、シスターに話して学校から退学させるなどと脅かさなかったら、今でもあの関係は続いていただろう。女子高から、男子優位の大学に挑戦する受験時期とも重なり、自然消滅という形で終わった。

大学に入ってから、男とデートもしてみたり、何人かとセックスもやってみたけれど、いまいち気持ちの高揚がなく、快感もなかった。下手なのにぶつかってるだけよと、友達に言われたが、アグリ自身は自分の性癖にしかと自信が持てないままだった。

「この子、私の新しいルームメイトのアグリ」

ゲイルが友達に紹介するたびにひと悶着が起きる。

「なに？あんなUGLY(アグリー)って名前なの？」

「違う。アグリーじゃなくって、アグリよ。AGURI。Uで始まる醜い子じゃないの」

「あのね、説明してあげる。彼女のお父さんがね、歴史上の人物からとった名前なのよ。彼女の苗字は浅野でしょ。だから、歴史上で有名な浅野内匠頭(あさのたくみのかみ)の夫人になった、浅野本家の阿久利(あぐり)姫の名前をつけたってわけ」

と、ゲイルがいつも助け舟を出してくれる。

「ひと迷惑な親父だよな。あんたが将来アメリカに来るなんてこと、考えてもみななかったんだ」

父親はともかくとして、なぜ津田塾出の母親が命名に反対しなかったんだろう、といつもアグリは思う。私の生まれる頃には、子供の命名を相談するような夫婦ではなくなっていたのだろうか。お姉ちゃんには、静(しずか)などつけておきながら。

あの歴史かぶれのくそ親父め。何が歴史小説を書いて直木賞をとってやるだ。またぎを主題にした小説を書くだのと大言壮語して、応募したとも聞かない。父親が物を書いている姿を見たのは古ぼけたセピア色の記憶だけ、最近ではお目にかかったこともない。「歴史読本」だの「歴史と旅」だのという雑誌が崩れ落ちそうに積み上げられている部屋は、男の体臭と酒の匂いがして大嫌いだった。ある時、それでも好奇心からなにか書いたものはないのかと机の上を引っ掻き回すと、綴じられた原稿用紙に何やら書かれていた。

—徳兵衛は突然えかりでこいがでなかった—

何だ、この文章は？

助詞の書き間違いで、「突然へ、狩で恋がで...」？

いいえ、そんなわけがない。

ああっ、わかった。えかりではなく、いかり（怒り）。こいではなくこえ（声）。

「怒りで声がでなかった」のつもりなのだ。

——漢字使えばいいのに、新しがって仮名で書いたりして。馬鹿が！——

アグリの父親の義政は、秋田県人で、東京へ出て四半世紀も経つのに、いまだにお国訛りがとれない。えといの混同は話し言葉においてしょっちゅう起こる。しかし、それを文士気取りの人間が、書き言葉においても間違えるとは.....

そのとき以来アグリは父を軽蔑した。

父の日常は、へべれけに酔って帰るか、家で一升酒をあおっては

「静御前、阿久利姫、近こう参れ」

と、ろれつの回らぬ舌で、大声をあげる。

部下に飲ませるのは上にいる人間たるものの務めだというのが持論で、月給はみんな飲み代で消えていく。拳句がボーナスは弓道の道具のしつらえで、今時ご大層に袴なんかを注文して使い果たす。結婚以来月給は入れたことがなく、自分の食費だけを母にわたす。だから父は単なる同居人の位置しか家庭の中にはない存在であった。

勤めと執筆でいつもフル回転してがんばる母を可哀想だとは思いつつ、何でこんな男と結婚したのだろうか、とアグリは常に冷めて見ている。

父と母が一升瓶を炬燵の上に置き、コップ酒で酒盛りをするのは良く見る光景なのだが、あるときケラケラと笑う母の声がひどく卑猥に聞こえ、アグリは覗いてみたことがある。炬燵から出ている母の足を父が舐めていた。

「ここがお前の快感のつぼだろうが...なあ、智子、えがったか？」

「おお、えがったよ、殿。えがった、えがった」

このとき以来、アグリは母も大嫌いになった。

こんな家から一時も早く出ていきたい。

父の血をひいて、色白の秋田美人の姉と比べれば、母似のアグリには秋田美人の片鱗さへない。鼻はぺちゃんこで、しかも鼻先はまんまるの上に、少しがけ崩れをおこしている。目は小さく、口元は分厚く締りがいい。よく言っても、「愛嬌のある顔」だった。

「アグリは、名まい（名前）負けの姫っ子になったすな。浅野まきでね（な）かった」

と、父は落胆していったことがある。まきとは、父のお国言葉で血筋・血統である。

かように、アグリは容貌に関してはコンプレックスの塊で育ち、お姉ちゃんを負かすには、勉強で勝負しかないことを心に刻んできた。頭も父親譲りで、どうしようもない短大にしか行かれない姉の静に対して、一ツ橋大を卒業し今やミシガン大のMBAを目指すアグリは、姉への挑戦はクリアーしたと思っている。

MBAがとれば仕事は保証されたようなもので、もう日本に帰る必要もなくアメリカに留まれる。この容貌もアメリカ人はキュートと言ってくれることにこの前の留学で驚いた。こうなったら次なる目標は、この容貌を日本的には評価できないオリエンタル好みのアメ亭でも見つけて結婚することかな。しかしどうも、男とのセックスにいまいち気乗りがしない。

「アグリ、いちいち名前のたびに嫌な思いをするよりはアメリカ名を選んで、それで呼んでもらうようにした方がいいよ」

「私もそう思うの。自分の名前に誇りを持って、アメリカ名をつけてはいけません、なんて高校のときシスターに言われたでしょ。ずいぶん頑張ったんだけど馬鹿くさくなってきた。お姫様の名前だと言いつくたびに、周りに日本人がいれば、この顔自覚して、気がひけることこの上なしだしね。名づけた父親の顔思い出すのもしゃくなのよ」

「そういうことじゃないのよ。親が付けた名前が嫌なら、自分の意思でおさらばしても一向にかまわない歳なのよ。アメリカでは簡単な手続きで名前は変えられるの。でも、いまはあなたはアメリカ人じゃないから、まあ便宜上のことをいってるんだけど。どう、なにか好きなニックネーム選んだら？」

「ゲイルに名案があるの？」

「普通は、音の似通ったものとか、出だしの文字の同じ物を選ぶね。アグリに一番近いのはアグネス。これはちょっとオールドファッションではあるけれどね。アンジェラとかアビゲイルなんてのはどう？」

「私がアビーで、あなたがゲイル。2人つなげてアビゲイルか、これもちょっとね。アンジェラって天使でしょ。また名前負けか。古臭くても、アグネスがいいかな」

「じゃ、それにしよう。皆にはアグネスって紹介するわ。皆がいる前では私もアグネスって呼ぶから。でも、二人のときは、阿久利（あぐり）でいいでしょ。漢字思い浮かべられるから。これもあなたのアイデンティティーの一部だからね。さあ、学校の名簿も変更してもらうように交渉しよう」

こうして、アグリの問題の多かった名前は、アグネスとなり、以後ごたごたと父親の顔まで思い起こす事態が避けられた。

「ゲイル、あなた神戸のカネディアンアカデミー育ちでしょ。うちの親戚の子が、日本にいる時その学校に行っていたのよ。今はニューヨーク州のウェストチェスターというところに住んでいるけど。同じ時期に学校に行っていたかな？」

「なんていう子？全校で500人足らずだったから、たいがいは知っているよ」

「兄弟二人なんだけど、秀樹ちゃんと敏樹ちゃんていうの」

「なに、あのヒデトシ兄弟。知ってる知ってる。それに、お母さんのミセス斎藤は、うちのダディーの日本語の先生だったのよ。家もすぐ近くだったし良く知ってる。アグリとあの子たちどういう関係なの」

「あの子達のお母さんの祐子おばさんとね、うちの母が従姉妹。だから私とは祐子おばさんは、セカンドカズン・ワンス・リムーブドゥって英語では呼ばれる関係かな。秀樹ちゃんと敏樹ちゃんと私が、ハトコというわけ」

「世の中狭いね。こんなところで繋がっちゃった」

ひとしきり神戸にいたころの斎藤一家との交流が、ゲイルの語るところとなり、この次アグリと一緒にニューヨークへ行きたいということになった。

夏学期（サマー・セッション）が終わり、いよいよ専攻科目の授業開始となった。

アメリカの授業は、読んでおかねばならない本の量がものすごく多く、読んでいかなければ授業の討論にも加われないのは前回の留学でよく分かっていて、それはそれは苦しい体験だった。いかに努力家のアグリでもついていけず、朝方まで必死で読んで翌日の授業にすべりこんだものだった。今回は速読法がだいぶ身につけてきて、アグリはさほど苦しくない。口のほうも滑らかにすべりだして、しばしばアメリカ育ちかと聞かれるくらいになった。

アナーバーは夏が終わったと思うと、まもなく暖房が欲しくなる。

「ミシガンの冬は、イリノイどころじゃないのよ。何しろ、実際の温度よりも、肌身に感じる温度がずっと低い。それはね、湖から来る冷気と風のせいなのよ。ウインドチル・ファクターって言うんだけど。アグリみたいに小さくて軽い人は風に向かって歩けないね。このどでかいゲイルさんの後ろを歩けば大丈夫だけどさ」

と、ゲイルに冬の寒さをおどかされた。

暖房が入りだし、セーターを着こみ、居間のソファに座って、温かいキルトの膝掛けをかけて本を読む。

「今晚は外が冷えてきた。初めての寒い夜かもね」

研究室から遅くに戻ったゲイルが、あったかくて気持ちよさそうね、とってアグリの膝掛けに入り込んできた。二人の目があつた。

ゲイルの手が、引き上げた膝掛けに隠れたアグリの乳房に触れてくる。

「小さい体に似合わずいいオッパイ持ってるね、アグリ」

大きいゲイルは、アグリを軽々抱きかかえて彼女の寝室に運んだ。

ゲイルのバスケットをした手は大きい。しかし、信じられないほどにしなやかで、実にデリケートなタッチをした。彼女の唇は、なぜか羽が体を触っていくように軽やかで、くすぐられているような思いでいるうちに、快樂の泉を湧き上がらせる。忘れていた感覚が甦り、若いアグリの体は火照った。

大きなゲイルの体に包まれるようにして眠るのは、なんとも言えない安心感があつた。

—今まで誰も私に与えてくれなかったこの安堵感。家庭でも得られなかったもの。母も与えてくれなかったもの。男からも得られなかったもの。もしかすると、母の体内でだけは与えられていた安堵感かしら？それともお祖母ちゃんの背中かな—

セックスの気持ちの良さとはまた違った、この安すらいだ気持ちがアグリにはこたえられなかった。—これが私の欲っしていたものなんだ—

アグリのミシガンでの最初の厳しい冬は、外の枯木立とは正反対に、心の中に色鮮やかな新緑の世界が広がった。

外に本物の緑が見え出すと同時に、あらゆる花がいっせいに開く。

黄色もピンクも白も紫も。パレット中のあらゆる色が、緑のバックグラウンドの中にこぼされたような春。

「ねえ、アグリ。5月の第1日曜日に、ワシントンで大々的なレズ・パレードがあるんだ。マミーがね、カルフォルニアから参加してもいいって言ってきたの。わたしは行くんだけれどアグリも行かない？」

「エッ、あなたお母さんにレズであること話してあるの？」

「勿論ヨ。隠しておく必要なんかないもの」

「それで、お母さん怒らなかった？」

「どうして怒る必要があるの。アグリ、ホモセクシュアルというのはね、最近の研究によれば好みの問題ではなくて、遺伝子の問題だろうって言われてきているのよ。ゲイの場合は、母親の持っているX染色体に乗っかっているのが解明されたのね。レズの場合はまだ良くわかっていないけど。いずれ研究が進んで科学的に証明されるわよ。私たち、なにも悪事を働いている悪者ではないのよ。隠す必要なんかないの。だから、パレードもするし、肉親や友人のサポートも取り付けて、世間にアピールしようとしているの。あなたも意識を変えなさい」

「そうかもしれないけど……」

「あなたは、お母さんに話してないのね」

「話したって分からないわよ。高校のとき気づかれて、ひどい目にあったもの。まるで変態扱いだった」

「意識が遅れているのよ、アグリのお母さんは。仕方がないかな。日本のほうが20年、この件ではビハインド（遅れている）だから。アメリカでは、同性愛は70年代にもう精神の病気からは除外されたのよ」

ゲイルに説得されて、とうとうアグリはワシントンのレズパレードに参加した。

ワシントンは、ミシガンよりも早く春が来る。もうポトマック河畔の有名な桜も終わっていた。

晴天に恵まれたその日は、汗ばむほどの陽気となり、パレードはまさにお祭り騒ぎ。みんな上着を脱いで、「アイ・ラブ・マイ・ドーター（私はレズの娘を愛している）」「レッツ・アウト・オブ・クローゼット（隠れるのは止めよう）」と思いつきのプラカードを掲げたり、母娘で肩寄せ合ったりして行進した。

このパレードの取材記事が大きく写真入りで、タイムに載った。

その中のあまり大きくはない写真の一つに、背の高いゲイル母娘に、小さいアグリがぶら下がっているような写真があった。

これが、アグリの母智子の知るところとなったのである。

烈火のごとく怒った智子からのEメールがアグリの元に入った。

レズパレードに参加していたのは貴女ですね。

あの写真が貴女ではないといえるのなら、釈明しなさい。

お母さんは顔から火が出る思いでした。

親不孝ものめが。親に赤恥かかせて。まだ懲りないの。

大学の人に気づかれたら、私の地位も危なくなります。

あんなことをするために、留学させたのではない。

事と次第によっては、帰国させます。

返事をメールしなさい。自宅のほうのPCに。 母

アグリは困ったことになったと思った。

ゲイルの言ったとおり、ホモセクシアルは変態性癖ではなく、脳の一部の違いや、性染色体

上の問題であるらしい、しかも、ゲイの場合は母親のX染色体に乗っているという研究が明らかにされた、と書き送った。

これは智子の怒りを更にあおる結果となってしまった。

自分の異常性癖を恥じるでもなく、あたかも私からの
遺伝のようないい方をして。失礼な！

私が異性愛だからこそあなた達が生まれたんでしょ。

私にレズの気はありません。

荷物をまとめて即刻帰国しなさい。

帰ってこないなら、今後送金はしないから

さよう心得なさい。

母

言い方がまずかったかな。なにか、勘違いをさせてしまったようだ。

兵糧攻めか、困ったな、とアグリは思った。

きつい授業を生き抜く為には、アルバイトをしてお金を稼ぐ時間はない。アグリは留学費用は、ロータリークラブからと、女子留学生基金からと出ているので、かなり余裕があったが、しかし親からの援助が一切なくなるとなると、やはりやっていかれなくなる。

ゲイルは、あちこちと奨学金の取れるところを調べてくれた。最初の一年目で、学部長の（ディーンズ）リストに載る成績を収めれば、それで初めて2年目に出願資格がもらえる。そこにたどり着かないうちに資金切れになってしまう。

アグリは進退極まった。

次第に不機嫌になり、ゲイルにも当り散らすようになっていった。

そんなある時、フト妙な噂を耳にした。

ミシガン大学の医学部の不妊治療チームが、卵子の提供者をオリエントルの女子学生から探しているらしいというのだ。

男子の学生が、精子を売っているというのは、日本の医学部にいた友達から聞いたことはあった。アメリカは不妊治療がもっと進んでいるらしいから、女性から卵子の提供を受けて、試験管ベイビーをつくるということかしら。医学に暗いアグリには、技術的なことは良く理解できない。精子の場合と違って、卵子はいったいどうやって取り出せるのだろうか。手術ということなのだろうか。

ちょっとぞっとしたが、今のアグリには、背に腹は変えられない。円に換算するとざっと80万円くらいが入って来るような話だったから、母の送金が絶えるなら、こんな方法でもお金を得なければならないだろう。

アグリは決断は早く、翌日早速不妊治療チームのところに出向くと、この件を扱う弁護士の事務所を紹介された。面談をしてくれた女性弁護士の話は、結構難題だった。

もう40代も前半の日系三世の女性で、白人の夫を持つ人が、卵子の提供者を探しているという。報酬は8000ドル。

この女性が出している条件は、IQテストが200点以上。1600点満点の大学進学SA

Tテストが英数合計で1400点以上。なにかの楽器演奏に才能があること、健康で、生命の危険を伴うような遺伝病が家系にないこと。筋ジストロフィーのような女性を媒体とする病気のキャリアーでない証明が必要。

できるならば、自分と似た子供が欲しいから、自分の20代のときと同じ顔立ちの人であって欲しい。

ここまで聞いたアグリは、あ、これはいけませんと思った。

—この私の器量で採用になるはずはない—

「これが、その方の20代の写真です。あなたのようにとても小柄な婦人です」

—エッ！ 他人の空似ってこの事。ブスさ加減もそっくり—

「正直言って、今まで面接にきた学生の中では、あなたが一番身体的特徴が似ているようですね。でも最終決定は、彼女とご主人が面接をして決めるそうですから、まずはこの書類への記入と、あなたの写真を提出してください。あら、どうしたの？黙ってしまって。質問は？」

「いえ、よく分かりました。よろしくお願いします」

アグリは、あとは半ば上の空でその人の話を聞き、退室してきた。

この世の中に他人の空似の人がいて、その人が私の卵子を使って私にも彼女にも似ている子供を作ろうとしている。それって誰の子になるのだろうか。

私の卵子とその人の夫の精子が合体して試験管の中で細胞分裂をしていく。でも育っていくのは、彼女の子宮の中だそう。育つ過程の養分は彼女の体から供給され、出産をするのも彼女であるならば、やはり彼女が母親で、私は単に芽の出る種を提供するようなものじゃないか。

私の体には卵子がある。

彼女には卵子を作り出す能力がない。

私はお金が要る。

彼女はお金でそれを買いたい。

—単純に言えばそういうことじゃないか。ギブ・アンド・テイクだよ。それに子供を持ちたいという彼女の夫の願いを叶えてあげられるわけだし、子供が作れないでひきめに思っているんだろう彼女を助けることにもなるんだ。卵巣の手術が原因で不妊になったらしいって。でも彼女は、子宮があって産む能力はあるんだからこのまま赤ん坊が産めないのも可哀想だよ。言ってみれば人助けだ—

アグリは自問自答でこう結論を下した。

このブスの自分に似た子なんて、なんとなく薄気味悪かったが、白人の血と混じったハーフになれば、どんな子が出るかは分かったもんじゃない、と半ば安堵した。

「アグリ、あなたいったい何考えてるのよ。そんなことしちゃいけない」

話を聞いたゲイルは、猛然と反対した。

「人助けだとかいうけど、それって自分の肉体の最小単位を売ってことでしょ」

「何言ってるのよ。売春するわけじゃないのよ」

「それは、肉体が肉体を買うわけじゃないから売春とはちがう。でも、生命の素を売るのよ。それって、売春よりもっとエシックス（倫理）の面で問題があるよ」

「なによゲイル、急におばんくさいこと言って」

「感情的にならないで聞きなさい、アグリ。不妊治療医学とか、超未熟児医学とかいうものには、医者先陣争いの行き過ぎがあるの。排卵誘発剤によって受精が可能になったのはいいわ。でも薬は人間の排卵のように1個を誘発できない。そのせいで7人・8人という多胎児の出産、それに伴う極小未熟児、多くの場合障害を持った未熟児ができていますよ。それではいけないと今度は減胎手術よ。これって何かおかしいと思わない」

「アメリカ人のあなたから、こんな意見をきこうとは思わなかった」

「子供が欲しいばかりに、人間が超えてはならないことをしている結果ではないかしら。不妊治療もね、夫婦間に限って医学の力で助けるところまでよね。そこで線を引かなくっちゃ。他人の精子や卵子をもらって、人間をクリエイト（創り出）してはいけない。セリゲット・マザー（代理母）なんてって他人のお腹を借りて子供を産んでもらうこともいけないわ。これって昔の日本の『腹は借り物』より、もっとアーティフィシャル（人工的）で間違ってる。夫婦間で子供が出来なかったら、それはそういう人生を受け入れるべきなのよ」

ゲイルは一気に言いきった。

「日本人よりも、愛を結婚の絆だと言ってきたはずのアメリカ人が、今では繁殖に必死になっているって感じ。日本人の子孫繁栄、お家大事とは違って、アメリカ人のは玩具を手に入れるようでチャイルディッシュ（幼見的）にみえる。これって、なにかおかしいよ」

「ゲイルって意外に古臭いんだ」

「アグリ、アメリカ人てね、遺伝の法則を忘れ果てている弊害に気づいていないのよ。あなたのIQだとか、音楽的才能だとか、将来自分の子供となる人間に望む条件を考えて言っていることでしょうか。でも、あなたという人は、あなたのお父さんとお母さんの血が、いいえさらに1代前の両方のおじいちゃんおばあちゃんの血も関わっているのよ。あなたの子供はあなたに似る可能性はあっても、あなたとまったく同じような能力を持つとは限らないのよ。現にアグリと静とは同じ親から生まれてもすごく違うでしょう」

ゲイルが話せば話すほど、アグリはかたくなになっていった。

「じゃゲイル、聞くけど、今の私にこの窮状を切り抜ける方法が他にあるの。卵子だって私のものですよ。無みたいなものよ。無から有を生じる、今の私には救いだわ。どんなことしたって、あの珍奇な父親と、どうしょうもなく頭がいい母親をみかえしてやらなきゃ私の人生ひらけないのよ。ここで尻尾を巻いて日本に帰るわけにはいかない」

いったいアグリの家庭の何が、こんなにもアグリを追い詰めているのだろうか。ゲイルは自分の専攻分野である精神分析的な心理療法に思いをめぐらして、彼女に救いの示唆を出来ないだろうかと考えた。

アグリは、その子無しの夫婦リチャードさんに数日後面接をして、すっかり気に入られてしまった。音楽のプロデューサーである夫と、言語治療士の妻は、アグリの弾く箏曲「春の海」に大喜びをした。まるで自分たちの子供が琴の名演奏家になるような錯覚をして。

洋楽でないからダメだろう、弾いてみようにも、琴の調達ができないだろうと思っていたアグリの予想を裏切って、リチャードさんは琴を借りてきた。この時ばかりは、父の希望を母が受け入れて、姉には日本舞踊を、アグリには琴を、一応指導者になれるところまで仕込んでくれた

ことを皮肉なめぐり合わせに思った。

弁護士が作った契約書には、生まれる子供への親権はいっさい主張しない、第2子用として冷凍保存する受精卵への権利はない、等の細かい事項が書きこまれていた。

法律用語にまでは詳しくないアグリは、ゲイルの配慮で紹介された弁護士を伴って出向き契約書にサインをした。この夫婦は、単に卵子を買いとるだけでなく、将来において卵子提供者のアグリと、生まれてくる子供を含めての家族が、付き合いをしていきたいという希望があった。リチャード夫妻は、それが新時代の「大家族（エクステンディッドウ・ファミリー）」としてのあるべき姿だと主張するのだった。

この点が、弁護士も多少危惧していたのだが、最終的にはその意向に沿うという線で収まった。アグリは、正直のところ将来にまでかかわりを持ちたくないな、と思っていたのだが、何せ、ここに来て話が白紙に戻ることがいちばん怖かったので承諾した。

契約するとすぐに、卵巣の状態の超音波検査、血液によるホルモンの検査があり、多数の排卵をするための排卵誘発剤の注射を自分で毎日打たなければならなかった。この検査は繰り返され、次週には別のホルモン剤の筋肉注射もなされた。

薬の卵巣への効き目を更に再び超音波で確かめ、卵子のサイズが測定され、排卵を起こす準備としてHCDというホルモン剤が与えられ、ついに採卵となった。

採取された卵子と、リチャードさんの精子との受精が研究室（ラボ）で行われた。成功して受精卵となった四個について更に細胞分裂を観察、翌々日リチャード夫人の子宮に移植され、残る八個の受精卵は次の子供の妊娠に使う予定で窒素ガスで冷凍保存された。

10日後にはリチャード夫人サンディーの血液検査の結果、妊娠が分かったといい、狂喜せんばかりのサンキュー・レターがアグリのもとに届いた。出産は3月の末とのことだった。その手紙には、生まれてくる子の日本名の名付け親になって欲しいと書かれていた。

なんだか煩わしいことにかかわりそうで、アグリはいささか嫌になってきた。あの人たちに、お金が欲しかったからしたまでです、と行ってやったらどんな顔をするだろうか。いまさら私が気に入らなくなったって、あの人たちは、赤ちゃんになっちゃったものを私に返せやしないんだから。

ゲイルとの仲も、しっくりいかなくなってきた。

分かったようなあの人の物言いは、母親を連想させる何かがある。

「ゲイル、私ひとりで住みたくなかったから、アパート借りるわ」

ゲイルは半分は驚き、半分はやっぱりという感じの目をしてアグリを見た。

「あなたのしたことを、わたしが知っているからなんですよ。誰かにしゃべられるとでも思っているの」

「そういうわけじゃない」

「心理学的にはね、自分の秘密を知っている人を避けたいという...」

「シャラップ！そのお説教が嫌いなのよ」

とうとうアグリは、イライラが爆発してしまった。

このところ、情緒が不安定なのが自分でも分かっていた。

順調に進んでいるのは授業のほうだけで、リチャードさんとのことも、ゲイルとのことも、うっとうしかった。そこえもってきて、姉の静が結婚するかもなどという手紙をよこしたのだ。あの男泣かせの異常性格が、治ったとでもいうのだろうか。

姉は父親似の日本的な美人顔に物をいわせて、若い同僚社員や、新入社員をみんな夢中にさせた。アッシー君、メッシー君、ミツグ君をさんざんさせた挙句捨てる。よくそれを自慢げにアグリに話したものだ。どうやら若い男とはセックスの本番まではいかないで、本気にさせて、じらす過程を楽しんでいる気配があった。

何人もとそれを繰り返したその次は、所帯持ちの相当年齢の離れた上司との不倫であった。これは結構のめりこんでいたようであった。が、奥さんに怒鳴り込まれる一幕があって、母が関係を断ち切るために静を別の会社に移した。

その頃だいぶおかしくなった静は、父親の布団に突然泣いてもぐりこんでいたり、廊下にたたずんで盆栽を眺めていた父親を突き飛ばして骨折をさせたこともあった。

あんな奴を奥さんにしようという男がいるんだろうか。カスつかむ男の顔が見たい。

静がお嫁に行くなどということは、許せない気がした。

ミシガン大での生活も一年が過ぎた。

卵子提供で懐具合が良くなったアグリは、貧乏学生用よりは少しましなアパートに移った。去年の今ごろ、寒くなりだした時に、ゲイルとのレズビアン生活で、得も言えぬ安堵感に浸っていたのが懐かしい。今の自分はお金は得たが、入れ替わりにあの頃の安らぎを失った。

「ハイ！アー ユー ジャパニーズ（君は日本人）？」

同じアパートの郵便（メール）ルームで、声をかけられた。このマークという公認会計士は、日本に1年間英語の先生で行っていたという。

「日本好きです。またいきたい」という。

その後デートをする仲となって、まもなく彼の部屋でベットを共にした。

が、すぐそのことに後悔をした。だいたい体臭が強くてやりきれない。

セックスもちっとも楽しくない。

今度は博士号を目指している学生のジェイソンとデートをした。

「アグネス、君はすばらしいよ。僕が待ち望んでいた人だ」

などといわれると、スーッと醒めてしまう。

それにジェイソンのセックスはなかなか勃起が起こらず、やたらにひつつこいばかりで、いらいらした。

次は韓国から来ている留学生のジェフと知り合った。彼はなかなかの紳士で、アメリカ人のように、すぐにベッドにいこうとは言わなかった。4・5回目のデートの後で、やっとキス。次の学内コンサートの後、ベッドイン。

男も悪くないか、とジェフのとき初めてアグリは思った。

何かぐにゃぐにゃしている勃起不全のアメリカ男に比べると、ジェフのものは硬くていきり立って小気味が良かった。

ところが、韓国経済のひどい傾きで、大量に韓国人留学生は本国に引き揚げた。ジェフもそ

の1人になってしまった。

またもや誰にも寄り添えないで、安堵感に欠ける寂しい日々がアグリに戻った。

ちょうどそんな時、ニューヨークの祐子から電話がかかった。

「アグリちゃん。クリスマスからお正月にかけてどう過ごすの。私達、家族でメキシコのカンクーンに行こうかって話しているのよ。あなたも良かったら、連れて行ってあげるけど、行かれる」

「嬉しい、祐子おばさん是非お願い、一緒に連れて行って」

とアグリは頼んだ。

実のところは、アグリを心配した従姉の智子から、アグリがどうしているか探って欲しいと裕子に依頼があって、お金を送ってきたのだった。ミシガンに偵察に行くよりもこんな形で旅に合流させるのが良いだろう、と祐子の夫の憲郎が提案した。

「アグリ、この頃あなた顔色悪いようだけど、どこも悪いところない？」

キャンパスで顔を合わせたゲイルに聞かれた。

「私しょっちゅう貧血気味なのよ。大学の頃1度ひどいのやったんだ。またかな。そう、そんなに悪い顔している？」

「顔が白いもの。白人の白いのとは別。オリエンタルとしてはまるでペイル（血の気のない色）よ。お医者さんに見てもらったら」

「うん、ありがとう」

ゲイルとしばらく顔を合わせないでいると、やっぱりいい人だな、と思う。怒っているかと思ったら心配してくれているんだ。

でもそんなにひどい顔をしているのだろうか。

このところ、男とも遊んだので、もしやエイズ、とハッとしたが、まさか大丈夫だろう。この頃の男の子は、ちゃんとこちらが言わなくても、コンドムを付けるのはマナーだと思って実行してくれるし。

このところ、生理のたびに出血がものすごい。以前高校でも、大学でもあった同じ症状なのだ。そのせいで貧血を起こしているのだろう。いつかもお医者さんに、貧血の薬を処方されたので、それでも買って飲んでみようか、とアグリは思った。

祐子の家族と会うのはアグリには久しぶりのことだった。

祐子は独身時代、よくアグリの家泊りがけで来ては遊んでくれた。母の智子に姉妹はなかったの、祐子は本当の叔母のようなものだった。祐子が結婚するときには、アグリと静の2人でフラワーガールをした。

祐子おばさんといえは、アグリにとってまず、きれいな花嫁姿が目につく。長じて物を見る目ができてからでも、あの日に感じたものは幼い日の幻想ではなかったと納得していた。祐子は、母の智子とは血の繋がりのある従姉妹などとはとうてい思えない、背が高く品の良い美人だった。

外国暮らしの商社マンと結婚して、出来のいい二人の息子と、離れて生まれた娘を得、何の苦労もなく暮らしている祐子おばさん。同じ女でも母の結婚運の悪さを思うとき、祐子の恵まれ

方には羨望がついて回っていた。綺麗に生まれなきゃ損ね、といった母の言葉が耳に残っている。

風が皮膚を刺し通すような寒さのミシガンから来たアグリには、皮膚にあたる風も、焦がすような陽も心地よく、カンクーンの空の青さは目に痛かった。アグリを「シアワセー」と叫び出したい気持ちにした。

憲郎が祐子に接する様や、小さい亜里沙を扱う様子は、アグリにとってただただ目を見張ることばかりだった。自分の父娘関係、自分の両親の関係には存在しなかったことばかりだ。まさに初体験。こういう家庭もあったんだ、とアグリは思う。

十分楽しんでるように見せよう、と精一杯演技をしているが、その実、心はなにか虚しかった。幸せそうな一家を見ていると、1人取り残されたような気持ちになる。

誰か私をすっぽり包んでくれる人が欲しい。

アグリは、ゲイルのことを思った。

でも、実際にもたれかかっていたのは、メキシコシティから来ていた男だった。情熱的な顔立ちも、ちょっとまだるっこいような英語のしゃべり方も、旅のアバンチュールにはもってこい。

祐子は、気分が優れないから夕飯は抜スキップといった昨晚のアグリを案じて、翌朝朝食のための電話をルームに入れた。

電話が出ない。

朝食の帰りに、祐子は憲郎に亜里沙を渡して、アグリの部屋をロックしてみた。

アグリは部屋に居た。

「気分はどうなの、アグリちゃん。よくなった？」

「祐子おばさん。ご心配かけました。もう大丈夫」

まるで何にもなかったようにけろりとしている。今日の船で行くシュノーケルにも参加するという。

亜里沙の面倒は良く見るし、秀樹や敏樹とはまるで歳が違わないように、はしゃぎまわっている姿は、まったく屈託がなく童女といってもいい。智子が心配してきていることが祐子には信じられない思いだった。

「祐子、今日船の中で、やけに黙り込んでいたね。どうした？」

夜、2人きりになると、憲郎が聞いた。

「あなた、あの子何か変よ。ジキルとハイドかしら」

「なんだい、いきなり」

「いいえね、子供たちと戯れていたりするのをみても明るいし、私達に対しても今の子にしては珍しく行儀もいいわ。まるで汚れなき少女とでもいうような。でも、数日観察していると、何か演技かなと思うことがあるのよ。それに今朝変なものを見てしまったわ。智子ちゃんの思い過ごしではないのかもね」

「何を見たっていうんだい」

「アグリの部屋のクローゼットが開けっ放しになっていたのよ。そこに、男物の一揃いが掛

けてあるのを今朝見てしまったの。ドキッとしてしまって、詰問できなかったのよ」

「ウン、男物ね。ゆうべわれわれに嘘ついて、男を泊めたっていうのかい」

「信じたくないけど。他に男物の衣類が置いてある理由がないじゃありませんか」

「実は、タベ敏樹がアグリちゃんがメキシコ人と歩いていたっていったんだよ。人違いだろうって言ったんだがね、敏樹の奴は、そそっかしいから。本当だったってことか」

「どうしましょう、あなた。仕送りが途絶えた後、男とでも暮らしているのか、ずばり聞くしかないでしょうか」

「ここでは十分発散させて、ひとつニューヨークに帰ってじっくり聞いてみよう」

このことがあって以来、紺碧の海も、セビチに始まるシーフード料理も、賑やかなメキシコの音楽も、遺跡の観光も、祐子にとっては心弾まぬものとなってしまった。

智子の夫婦生活が、特に智子の夫の義政が何らかの形で、アグリに影を落としているように思えてならなかった。自分の少女時代を振り返っても、父親の存在と影響力は大きかった。父親の存在感なしに育った女の子の、深層心理には何が巣くうのだろうか。

「パパ、アグリちゃんて、エッチなことばかり聞くよ」

敏樹がそういう傍で、秀樹が目配せを送っているのを祐子は見咎めた。

「何を聞かれたんだい」

「アメリカ人のペニスの大きさとか……な、ヒデ」

「それで、お前達なんて答えたんだ。きっと男の兄弟なしで育てているから、興味があるんだろうよ。パパが教えてやるから呼んでおいで」

「あなた、そんなこと……」

「性教育だよ。かえって、おおっぴらのほうが、アグリちゃん話し易いだろう」

お呼びですか、とアグリが2階から降りてきた。

「アグリちゃん、日米男性のペニスの比較なんかを聞きたいんだって？」

えっ、とアグリは絶句して、真っ赤になってしまった。

「この家では、そんなこと家族で話すんですか。信じられない」

「驚いたでしょう、アグリちゃん。うちはおじさんの教育方針で、おおっぴらなのよ」

「人間の性に関しては、隠しすぎるのは良くないんだよ。とにかく、男だけの兄弟は女の子のことが分からない。女の子の姉妹だけだと男の子のことが分からない。性はもともと人間の根源の欲望だからね、良く理解しておいたほうが、男女の中も、夫婦の中もつまずきが少ないよ。そうそう、ペニスの問題が聞きたいんだったね」

憲郎は、自分が過ごしたアメリカの大学での寮生活の中で、男どもはフルチンでシャワールームに出入りするので、山ほど目撃している、と話した。確かに、アメリカ人男性は、日本人男性に比べ、ぶらっと大きいものが下がっている。日本男性の中でも違いはあって、例えば自分と弟ではついてるものが違う。小さいときには、ひそかに悩んでいた、といった。

「アグリちゃん。あれはね、使わないときは、小さく収まっているほどいい。要は、使用するときのサイズと硬度が問題なんだから。これを研究した人がいるんだよ。するとね、日本人のは、膨張率において世界でも抜群だったってことだ」

「フレスコに入れた水が、膨張時にどれだけこぼれたかって話でしょ。怪しいもんだよね、そんな実験」

また始まったよ、もう僕達は聞いた話だから、おやすみなさい、といってヒデとトシは茶化しながら自室にひきあげていった。

「アグリちゃん、うちの子達も、もうアクティビティー（スポーツ活動）で、皆とシャワーをするでしょう。小さすぎるとひそかにコンプレックスを持って、女の子に近づけないようなことになっては困るからね、こういう教育してるんだよ」

憲郎の言葉にアグリは、目を白黒させてしまった。

ここの家が特殊なのだろうか、それとも家族とはこういうものなんだろうか。

アグリは憲郎のあまりの開けっぴろげさと質問上手に、つい口にしてしまった。

「私、実は、男の人とのセックスがどうしても、いまいちしっくりしないんです。怖いんじゃないんですけど。一番始めに、高校のとき、上級生からレズを教えられちゃったせいかな。相手が女性の方が安心できるんです」

「うん、同性愛か、異性愛か、はたまた両性愛か悩んでいるわけね。この頃そういう研究がアメリカでは進んでいてね、脳の中の違いにまでたどり着いて原因の究明に近づいてきているらしいよ。医学部の図書館で文献を調べてみるといいよ。性倒錯とっていったような時代ではないんだよ。今じゃ、うちの子達は学校でそういうことを習ってきているもんね」

憲郎は、知人のアメリカで高名な泌尿器科の医師が体験した実話というのを話した。

この医師が救急室勤務の、今から四十年ほど前のこと、自らの手でペニスを切り取ろうとして、切断しきれないでいる男が血まみれで担ぎ込まれてきた。

「勿論先生はきれいに切断してあげたんだそうだ。その男はね、先生の手を取って、ありがとう、ありがとう、と泣いたって。自分は小さいときから、男でいるのが嫌で嫌でこのペニスが恨めしかったんです、無くなっ嬉しいって」

今では、手術という方法で、本人の願いが叶えられるように医学界も変わってきている。性転換の願望を抱く人が、異常性格者という偏見の素に抹殺されない研究がなされてきた結果だという。自分の持っている肉体的な性が間違いであると感じるこういう人々は、医学的(トランス・ジェンダー)性同一性障害という名前がついて、性の転換が可能になった。

「その時『異常じゃないなら何なんですか』ってトシが先生に聞いたんだよ。そしたら、老先生は、それを研究し、証明をするのがこれからの君達のような若い人たちの使命ですよ。多分、遺伝子学で解明されていくはずですよ、こう言われた。科学の力でいろいろな事が証明される時代だからね。異常とか正常とかいう時代ではないね」

憲郎の話の後で、祐子が口をひらいた。

「アグリちゃん、お母さんが心配しているのは、あなたが変な遊びをしていると思っているからかしら？」

「私のこと、母は変態人間だって思ってますから。今、おじさんから聞いた話なんか、聞く耳持ちませんよ。祐子おばさん、こんなこと話したのは母に黙っててください。どんなことがあっても、ミシガンでMBAとって、この国で仕事に就きたいんです。今母から、兵糧攻めにあってますけど、何とか節約でやっていけてます。どうしてもやれなくなったら、出世払いで

、憲郎おじさんお金貸してください」

最後のほうはアグリは、意図的に芝居をした。

卵子を売ったことは、祐子夫婦にも、母にも知られなくなかったからだ。

アグリは、祐子夫婦や、ゲイル、ゲイルのお母さんのように、自分を変態と扱わない人といると、母に向かうようには頑なにならないでいられて、気がやすまった。

祐子と憲郎は、その夜、ある種のアグリの異常性をやはり気に掛けていた。

二人に向かって、おじさんとおばさんがセックスをするのをこの目で見てみたい、という発言をしたからだ。本当に愛し合っている夫婦のセックスってどうゆうものなんだろう、ともいった。いかに憲郎が開けっぴろげな話をしたからといって、そんな事をいうなんて、何かが欠落している人間にしか祐子には思えなかった。

「それに、あなた気づいてらした？私があなたの飲み残したお茶を飲んだ時の、あの子の驚きようと発言」

「ああ。『祐子おばさん、おじさんの飲み残しのお茶汚くないんですか』……だろ」

「そうなのよ。『うちでは、お父さんのお茶碗もお箸も汚いって、お母さんは洗いもしませんよ』っていったでしょ。やっぱり智子ちゃんがいけないのね」

「あの歳になっても、そういう母親の発言を無条件に信じるものだろうか。どこかおかしいな。それに、夫婦、男女を汚いと見るようじゃ、やはりアグリちゃんの男とのセックスは、そこにたどり着く前にメンタル・ブロック（精神的な障害物）があるね。彼女の場合は、肉体的な因子というより、心理的、精神医学上の問題だろうね。これ以上は我々素人には解明できんだろう。精神分析か、心理療法の専門家にでも相談しなきゃ」

祐子一家と過ごしたアグリの体験は、大げさに言えば、それこそ腰を抜かささんばかりであったらしい。「目から鱗、仰天の連続でした」と礼状には書かれていた。

この体験を、アグリは誰かに話して意見を聞いてみたくて仕方がなかった。結局話し相手を選んだのは、ゲイルであった。

ゲイルは、何を驚いているのよ、正常な夫婦じゃないの、と言っただけだ。性教育のことも、アメリカの家庭では隠さないで知らせるのが最良と思っている人が多い、ともいった。

アグリはやっと、自分の育った家庭が、父母の関係が、母娘の関係が、父娘の関係が、少しかわっているのかな、という疑問にたどりついていった。

学業の忙しさと、出血のひどさの恐怖とあいまって、今では、誰彼かまわず相手欲しやのセックスをしなくなった。あの時期を狂気かな、と思うようにもなっていた。

三月末にはリチャードさんで、自分の卵子を使った赤ん坊が生まれる。

何か煩わしくて、ここに居たくない。

ちょうど祐子が、ニューヨークのイースター・パレードを見にこないかと誘ってくれたのを幸いに、ゲイルを伴ってアナーバーを後にした。アナーバーの空港のときから、すでに空模様がおかしかった。天気予報は、時ならぬ寒波で雪になりそうだといっていた。

ニューヨークの祐子の家では、ヒデもトシも10何年ぶりかのゲイルとの再会を懐かしみ、突然神戸弁で3人の会話が進んでいく。祐子は、男性を感じさせる女性に育ってしまったゲイルから、幼い日を思い出すのに戸惑っていた。

しかし、なんと爽やかなひととなりなのだろうか。

さばさばとしていて、礼儀正しく、母親のサンディーを彷彿とさせるものがあった。こんな人とアメリカにきて友達になれたアグリを幸せな、と思った。そのとき、祐子はどうしたわけか、彼女のレズの相手がゲイルではないかと思ひ至り、慌てて打ち消した。

あいにくと、イースター・パレードの前日から、ニューヨークー帯は雪になりだした。ミシガン州やウィスコンシン州を覆う寒波がニューヨークに下ってきたのだ。

その日、ゲイルとアグリは、憲郎と祐子のクロスカントリーのスキーを借りて、ゴルフ場1周にでかけた。このあたりのパブリックのゴルフコースは、雪が降るとカントリースキーをさせてくれる。

途中から猛吹雪になりだし、お互いの顔も良く見えないほどに雪が吹き付ける。もう2つぐらい林を抜ければ、多分クラブハウスというところまで来たのだが、ゲイルほどには達者でないアグリは、もうへたばっていた。このままの雪だと、クラブハウスまでは無理かなと思ったゲイルは、橇をとりて1人でクラブハウスに行ったほうがいいと判断した。

アグリを木の下に休ませ、くれぐれも動かずに待つように言ってクラブハウスを目指した。スキーの達者なゲイルは、30分足らずで橇を持って戻ってきたが、アグリの姿が木の下から消えていた。

雪で見えない四方八方に向かって

「アグリー、アグリー」「アグネース、アグネース」

と叫んでも、応答がない。アグリがもしや動いたとしても、この積雪量ではスキーの跡をトレースはできない。雪は何もかも一瞬のうちに消してしまう。

幸い1人のスキーヤーが通りかかった。

彼にクラブハウスへの応援と、祐子への連絡を頼んで、ゲイルはそこに留まった。

雪の降りようは、小さなアグリの体を隠してしまうのではないかと思われるほどの凄さであった。ゲイルは、アグリの卵子によって生まれる子供の代わりに、アグリがこの世から消えてしまうのではないかと思ひ悪寒が走った。

動いてはならない。応援が来るまで待つしかない。ゲイルはじっと待った。

早く、早く、早く来て。

ゲイルは感覚のなくなりそうな手をこすり合わせ、足踏みをしながら、応援がいつときも早く着くことを祈った。

先ほどのスキーヤーがクラブハウスの人を連れて戻ってきた。

9・1・1(ナイン・ワン・ワン)を頼んだから間もなく救急隊が来るだろうとのことだった。

救急隊員といっしょに憲郎と祐子が愛犬のカイザーを連れてきた。ポインターのカイザーは、猟犬だから役に立つだろうと、憲郎がアグリのパジャマを一生懸命嗅がせている。憲郎だけが救急隊といっしょに動くことを許されて、ゲイルと祐子は木の下で待つように命じられた。カイザー頼んだぞ、という憲郎の声が遠ざかって消えた。

カイザーの吠える声が遠くでして、まもなく連絡用の携帯に、発見の連絡が入った。しかし、アグリは出血多量で意識がなくショック状態とのこと、いったい何が起きたのだろうか。

運び上げられてきたアグリは、真っ白な顔をして意識が無く、死んでいるように見える。祐子は大きな体のゲイルにしがみついた。

あがってきた憲郎の話では、今でも出血が続いており、非常に危険だという。

「いったいどこを怪我したの。大腿動脈でも切ったっていうの」

「違う。どうも子宮からの出血らしい。しかし、ただの生理の出血ではない。どんどん流れるように出ているようだ。大至急応急処置が必要だから、1番近いウェストチェスター・カウンティー病院に運ぶそうだ。我々もすぐ車で追いかけねば。取り敢えずの応急処置へのサインはしておいた」

「あなたが帰ってきてくださって、ラッキーだったわ。この雪だし、私1人では車の運転だって、足がすくんでしまう。妊娠していて、流産とでもいうことかしら...」

突然のただならぬ出血に気づいたアグリは、クラブハウスを目指そうとして道に迷い、出血多量で失神してしまったのだろう、と医師はいった。

アグリはどうやら、止血が成功して生命はとりとめたようだ。が、大量の出血による輸血を今晚し続けてみないと危機を脱しないという。救急医は祐子夫婦に、グレープフルーツ大の子宮筋腫があります、と思ひもかけないことを告げた。

医師は祐子の手を取ってアグリのお腹に乗せる。

「ここはこの通りやわらかくてへこみますね」

とって、腹部を軽く押す。

次に祐子の手を動かして持っていったところは、コチンと固くてへこまい。

「これが筋腫です」

足元から背筋にそってゾーッと寒気が這い上がり、祐子は声も出ないまま憲郎にしがみついた。

数秒呼吸を整えて

「先生、まだ未婚の24歳です。この子の子宮は……」

「ここまで大きくては、多分全摘でしょう。残すことは無理だと思われます。なぜこんなになるまで気がつかなかったんでしょうね。今夜中にまた出血があれば、恐らくその場で手術をしなければなりません。うまくいって明日の朝を迎えられたら、複数の専門医の意見を聞かれるといいでしょう」

祐子はそばに憲郎が居てくれるのを有難いと思った。

1人では、耐えられぬ怖ろしさだった。さきほどの足から上がってきたあの震えは、今までの祐子の人生で経験したことのないものだった。

家に帰ったら、智子に告げるという難事が待ち構えている。心臓病の既往症がある智子に、どうショックを与えずに告げられるだろうか。多分本題に入る前に、ニトログリセリンを首につる下げているかどうか、確かめなければならないだろう。

家に着くと、祐子はこの数時間の恐怖で夕食の支度をする気力も残っていなかった。

子供二人が、簡単な夕食を準備しておいたというのを聞くと、急に涙があふれてきた。

時差を考えると、今、智子を家で見つかることはできない。とにかく明日早朝つかまえよう。先に休みなさいという憲郎の言葉に甘えて、祐子は目覚ましを掛けてベッドに入った。が、智子に言う言葉を考えると寝付けなかった。

憲郎がベッドに入ってきた。祐子は起き上がると

「あなた、今日は本当に有難うございました」と頭を下げた。

「ゲイルはどうしてますか？」

「彼女も、ものすごいショックのようだ。とんだイースターになってしまったな。智子さんには僕が話してあげてもいいが」

「いいえ、私が」

「そうか。そうだな、向こうだって泣きたい思いだろうから、相手が君のほうが楽だろう。僕だと、あの人のことだ、突っ張らざるをえないだろうからね」

憲郎がそっと抱き寄せるのに身を任せ、暖かい思いに包まれてまどろんでいった。

病院からの電話が鳴らなかったということは、アグリが無事朝を迎えられたということだ。祐子はホッとして朝の光を見た。

みんなが休みなので寝ていてもいいのだが、もう起きよう。階下では愛犬のカイザーが外に出してもらおうのを待っている。居間のドアを開けると、カイザーは昨日の吹雪で降り積もった雪の中に勢いよく走り去っていった。昨日のご褒美に、たっぴり今朝は自由に走らせておこう。真冬と違って、雪面を照らす朝の陽光はまぶしい。

雪の白に、躍動するカイザーのチョコレート色が、見事なコントラストを見せているのだが、祐子にはなんだか古いセピア色の動画がゆっくり動いているように、ぼーっと感じられた。

早朝の智子との会話が思いだされる。

何故あんな言いかたしかできないのだろうか。

「ご迷惑掛けて申し訳ないわね、祐子ちゃん。アグリに言ってやってちょうだい。子供なんか生めなくても、仕事を持っていれば女は立派に生き抜いていけるって。しっかり勉強するようになって言ってね」

子供なんか、とはよくいえたもんだ。子供こそ命の智子が。

しかも、すっ飛んで来るかと思いきや、なんという母親だろうか。

「私、飛行機乗るのフォビア（恐怖症）なのよ。大学のほうも抜けられないし。祐子ちゃん、このご恩はお墓まで持っていく。面倒見てやってちょうだい。憲郎さんに謝っておいてね」

娘が、女の命を失うだろうという時に、傍にいて支えになろうとはしないなんて。

憲郎のいう通り、突っ張っている。

私に突っ張り見せる必要もないのに。泣けばいいのに。アグリのために泣いてやればいいのに。

この母娘の前途は険しいな、私の手に負えそうもない、と祐子は思った。

2階から誰か降りてくる。足音を忍ばせるように。ヒデでもトシでもないな。

「やっぱりもう起きていたんですね」

ゲイルだった。

「ミセス斎藤お話があります。皆が起きないうちに話したいのです」

ゲイルは、今度のことでアグリが子宮を失うことになれば、専門の精神分析医か、心理療法士か、カウンセラーのヘルプがなければ立ち直るのは難しいだろうと思う、といった。それ以前から、お父さん、お母さん、お姉さん、家族の皆を敵対視するトラブルが存在している。専門分野だから、ある程度は分かるし手助けしたいが、彼女は自分には心を開かない。

「いつか、言い争いになって、シャラップ、て言われてしまいました。お説教がましいのは、お母さんみたいで嫌いだっていうんです。何かにすごくイライラしていて、突然情緒不安定になりますね。このまま放ってはおけません。でも私ではダメだから、誰か専門家を紹介してみます。ヘルプしたいんです」

本当はゲイルは卵子提供のことも引っかかっているとは思うが、アグリが自発的に言う以外は、他言してはならないと心得ていた。

祐子とゲイルが病院へ出かけようとしていると、電話が鳴った。

電話を取ったトシが、ミスター・リチャードから、アグリちゃんへだけどうしようという

。

電話を代わった祐子が、アグリは病気で臥せっているのに、電話に出られませんが、どういうご用件でしょうか、と丁寧に聞いている。はっきりしない電話に祐子は怪訝な顔をしていた。ゲイルには、何のための電話かすぐピンときた。赤ん坊の出生を知らせたかったにちがいない。

なんと皮肉なことに、アグリの卵子で作られた子供の出生と入れ替えに、アグリは子宮を永遠に失おうとしている。子供の産めない体になる。

一応危期を脱して朝を迎えたアグリを、翌日祐子は大至急自分の出産を扱った二人の産婦人科医に診せ、意見を聞いた。どちらの医師も全摘しか方法はないだろうという。念のために、両医師の紹介で腕の良い婦人科手術専門女医のドクター・ライアンにも診てもらった。

「お気の毒ですが、9分9厘全摘です。しかしながら、彼女が私の娘であったら、何としても子宮を残す可能性を探します。その気持ちで手術に望みましょう。でもダメである可能性のほうが強いのですから、打ち勝つ心の準備をしておいてください。カンセラーに事前に会うのも良い考えですね」

といわれた。

いまさら言ったとて、繰言ではあるけれど、何故こんなに大きくなるまで気づかなかったのだろうか。自分のお腹を触るということを若い人はしないものなのか、と祐子はその迂闊さを責めたい思っていた。若いときから異常出血があったというのに。

手術待ちの祐子の自宅で

「1度高校生のとき、お母さんに婦人科で診てもらいたいといったら、『色気狂(いろきちがい)が、その歳から婦人科に行きたいなんて』と言われたの」

と、アグリは言った。

こう説明したときの、アグリは放心状態のようだった。祐子をも、ゲイルをも見ていない呆けた顔だった。しかし祐子の家のベッドから、雪景色に当てている眼だけは異様に光っていた。

智子とアグリの母娘関係の修復の困難さを祐子はこの目に予感した。

ぼろぼろの心と、切り裂かれる若い身体。

私が包み込んで癒してやれるだろうか。とてもできそうにない。

大学に帰らなければならないゲイルは、こんな混乱と傷心のさなかにいるアグリにリチャードさんの電話の件をいいたくはないが、言わないわけにもいかないだろうと思った。

「アグリ、リチャードさんで赤ちゃんが生まれたと思うのよ。電話がかかってきていたわ。おばさんたちに変に思われないうちに、あなたから連絡を入れたほうが良くない」

アグリは祐子に了解を得て、すぐに長距離電話をした。

「女の子。少し早く生まれて、小さいって。6ポンド2オンス(2780グラム)。ステファニー・ヤヨイ・リチャード。『帝王切開でなく産んだから、またすぐネクスト・ベイビー作れます、ラッキーでした』だって」
無感動な声で、アグリはいった。

「ダメだわ。ネクスト・ベイビーなんか作らせない！あれは私のものよ！」

急に、アグリの声がひきつった。

「アグリ、何をいいたすの。あれは、あなたが売ったものでしょ、あなたのものではないのよ。契約にサインしたでしょ」

「じゃあ、半分お金返して買い戻せばいいじゃない」

「何を言っているの。もうあれは、単なるあなたのフローズン・エッグじゃなくて、ミスター・リチャードの精子との、ファーテライズドゥ・エッグ(受精卵)よ。受精卵といっても、すでに中にはエンブリオ(胎芽)ができている状態で冷凍保存されているはずよ」

「だったら、リチャードさんに、精子の代金を払うわ。ねえ、ゲイルお願い。私にはもう子宮が無くなるの。子供が産めない。あの受精卵を買い戻すから、セリゲット・マザー(代理母)になってよ。

あなたなら子宮がある。子供が産める。そして二人で一生いっしょに子供を育てていけるわ。私はゲイルといっしょに暮らしたい。安らぐのよ、あなたと居ると。お願い。男と子供を作るようなことはしたくないあなたでも、母親にはなってみたいはずだわ」

アグリの激昂ぶりは、すでに常軌を逸していた。

子宮を失う怖さと必死で戦っている様が、手に取るようでゲイルは痛ましかった。が、アグリの言っていることは、叶うはずも、受け入れられるはずもないことだ。自分だってセリゲット・マザーなどということは考えたことも無い。

あなたが聞いてくれないのなら、リチャードさんに直接電話をかけて交渉するとアグリは言い張って聞かない。もう今夜は遅いから、向こうに迷惑よ、といってもききわけない。とうとうどなりだして、部屋を飛び出し、祐子の許可も得ずに電話にかじりつた。

「いったい何があったの」

と、祐子が寝室からでてきた。怒鳴る声が聞こえたのだろう。

「なにか、精神安定剤はありませんか。アグリがひどく昂奮してしまって。子宮を失う恐怖と戦っているんだと思います」

ゲイルは、アグリの電話の声をカバーするように大声で言った。

リチャード夫人のサンディーと話しているようだ。事情を知らない祐子にも、話の様子が異常なことが知れてしまうに違いない。

「あなたが、あんまり分からない事をいうなら、弁護士同士で話をさせるしかないわ」

ときれときれながら、サンディーの昂奮した大きな声が、電話から漏れてきて、ゲイルには意味が通じた。

「何か裁判になるような危険なことに、アグリは巻き込まれているのでしょうか？」

細かいことは分からなくとも、祐子も異変を感じとったようだ。

「後でお話します」

と、ゲイルが言っているうちに、ギャーという悲鳴に近いアグリの声が聞こえ、2階の部屋に駆け上がっていった。

祐子とアグリが後を追った。

すでに顔面が紅潮して、痙攣が始まって四肢を突っ張りだしていた。見る間にアグリは失神してしまった。

祐子よりゲイルは落ち着いていた。

祐子に病院の救急に電話をかけるように、トシに車のエンジンをかけるように、ヒデにアグリを車に運ぶ手伝いをするように指図した。ゲイルは祐子にヒステリー性失神でしょう、危険ではないと思いますが、病院で鎮静剤を打って眠らせてもらったほうが良い状態のようです、とささやいた。

明日には手術をするほうの、ニューヨーク市マウントサイナイ病院への移送を約して、取り敢えず今晚はウェストチェスター・カウンティー病院へ再入院させてもらって、ゲイルと祐子は家に戻ってきた。

「ミセス斎藤。わたしはアグリとしばらくの間レズビアンの関係でした。アグリのように心に傷がある人は、秘密を知った人を避けるという傾向があります。物質的にも、精神的にも、負

債を意識した人も避けます。わたしも彼女の秘密を知ったので、結局は私から逃げていきました。今度のことでは、お宅には親代わりをしてもらい、すごく精神的に負担に思うはずですよ。逃げていく可能性があります、そうならないように、私も力になりたいんです。今度は身体だけじゃなく、心も治療するチャンスですから。大学に帰ったら早速先輩の医師に相談して、適任者を決めておきます。そのために、アグリの家庭のこと、気づいている問題を教えてもらえませんか」

「ありがとう、ゲイル。あなたに力になっていただいて、アグリは立ち直らなければね。私から見ても、いっぱい普通ではないところがあるように思えます。確かにあの子の家庭に問題の根はあると思います」

祐子は語りだした。

アグリの母親智子は私生児だった。

智子の母、つまりアグリの祖母、祐子からすると伯母が、私生児を生んだ訳だ。

今のように、シングルマザーなどという言葉がない時代、私生児はててなし子といわれ、父親の分からぬ子を生むなどということは、世間から非難され、一家の恥とされた。

良家の子女であった智子の母が、なぜ当時ふしだらなと世間から後ろ指をさされるようなことをしでかしたのかは、よく分からない。一説によると悲恋のはて、やけになったともいわれている。が、とうの伯母が口を閉ざしていたので、本当のことは分からない。

整った品のある顔立ちの伯母から、まことに不細工な智子が生まれたとき、皆は家に入りにしていた大工にそっくりだといったという。未熟児で、当時なら死んでしまう赤子は、ピーピーと泣いて、4歳まで下痢のしっぱなしであったが、それでも生き延びた。

智子が5歳になるまで、母子で両親の家、つまり祐子の祖父母の家に居候をしていた。

伯母は5歳の智子を連れて、5人も子供の居る、20歳も年上の男の後妻になった。タクシーの運転手であったのが、小金を貯め自分でタクシー会社を運営している男だった。

綺麗な伯母を見初め、智子も自分の子として入籍してくれるという条件は、学校に上がるのが近づき、心を痛めていた伯母にとって、首を縦にふる唯一の理由だった。勿論妹たちの結婚に自分たち親子が差し障っているという肩身の狭さもあつたろう。

この男は智子を可愛がってくれたし、伯母にもぞっこんであったが、何ととっても伯母の育った環境とは大違いで、無教養で守銭奴な男だった。またしょっちゅう女出入りで揉め事を作る男であった。

智子は小粒ながら、学校の成績は抜群で、5人の義理の兄弟姉妹と調子を合わせるのがうまく、生き抜く術を子供ながらに備えていた。また、不器量を愛嬌でカバーし、人に好かれるつばを心得ていた。

だから養父も、兄弟姉妹も誰1人として、智子が津田塾を出て、職を得、修士号を取って数年後、浅野義政と結婚するや、母親を離婚させて引き取っていくとは夢にも思っていなかった。伯母も下町のおかみさんに徹し、横浜山手のミッションスクール出のお嬢さんの片鱗さえ見せず、魚屋、煙草屋、八百屋と商店街のおかみさん連と折り合いよくやっていたので、周囲も啞然とした。

80を超えても、近所の美容院の女の子に手を出し、その色好みが有名で、完治しない性病持ちの夫から移された病気に悩まされ続けた伯母は、我慢がならなかったらしい。ある時妹たちに「早く脳梅にでもなって死んでしまえばいい」といったという話が残っている。

育ててもらった恩も忘れて、と智子は義兄弟からののしられた。

が、智子にしてみると、助平で無教養な養父に、自分のために連れ添い、耐える一生を送っている母親が可哀想で、恩返しは自分が働けるようになったら、母を自分が引き取ることを、誰にも言わないながら固く誓っていたのだった。

しかしその誓いを実行するには、頭脳や教養が合わない男と連れ添うという、母と同じ道を選ぶ皮肉な運命になった。

智子の夫義政の先祖は秋田北部の庄屋で、何不自由ない資産家の長男と吹聴していたが、実は学生時代に共産党に入党、労働運動に深入りし、親から廃嫡されていたのが実情だった。共産主義にかぶれていても、倫理的には武士道精神、実利面では資本主義というごちゃまぜ人間で、言うことと、なすことの一致しない男だった。

労使問題の研究会でお互いに顔見知りとなってすぐに智子は求婚された。

「わだすは、ままだ支度（おさんどん）するおなごを探してるでね。ちみのようなさがないひっどは一、世のなかのたえ（為）に働いてください。応援すっがら頑張ってください。おっが（母）さんもしきとって大事するがら」

「あの...サガシヒッドとはどういうことで.....」

「あ、すいません。昂奮すつと一、つい秋田の言葉になつて。サガシヒッドではなくて、さがない人です。秋田弁で才女ということです。もう一度標準語でいいます」

「いえ、あの、お気持ちはよく分かりましたので」

人生の一番ロマンチックであるべき1こまが、漫画チックでかつ己の打算に彩られていたことを、智子は後々苦々しく回想していただろう。

しかしその時は、私生児のことも驚かずに聞いて、女らしいことは出来ないという、こう言ってプロポーズをしてくれた男に、彼女はころっと参ってしまったのだった。子連れならぬ母連れで結婚したい智子に、母親を引き取って一緒に暮らそうなどという男は2度と現れまいと思えたのだ。

小柄ながら、鬘（ずら）でも付ければ武者絵になりそうな義政であったから、こんな男前の男と結婚できるとは夢のようだった。この人に似た子供ができれば、私のような思いをさせないですむ、と智子の醜女（しこめ）コンプレックスに光明をも投げかけた。

が、結婚してみると、義政には多額の借金が飲み屋にあった。月給を入れるどころか、智子からも注ぎ足して、借りを清算させねばならなかった。1つが片付く頃には、別のところにまた借金が山積みした。この繰り返しで、義政と智子とはお金のことで喧嘩が絶えなかった。母のことで義政に引け目があり、母には肩身の狭い思いをさせたくない智子は、やがてお金のことを言わなくなった。

以来、稼ぎ手は智子、子育ては智子の母、給料をいれない居候が義政という、3人が3様に気を使い、3様に恨みを持つという、妙な三角関係の暮らしが浅野家には定着した。

智子が企業留学で2年間アメリカに行っている間、智子の母が幼子2人を抱え、主婦と母親業をやった。このお陰で智子は、博士号を土産に帰り、やがて大学教授への道が開けた。が、幼

い2人の姉妹には、父の影のない家で、母も不在の心細さを、お祖母ちゃんに必死でしがみついて、姉妹の間でもお祖母ちゃんの愛を奪いあって暮らした。

「アグリ、お父さんとお母さんが離婚したら、どっちに付いていく？」

こう言った静の言葉が、あぐりの人生での最古の記憶だというのだ。そのとき、アグリは「わたし、おばあちゃんについていく」と答えたのだそうだ。

智子型で、人に合わせ、人の機嫌をとるのに長けている静と違い、アグリは小さいときからおばあちゃんべったりで、両親にはなつかない子であった。

アグリが高校生の時、くも膜下出血で倒れた智子の母がその後痴呆状態となり、智子が特養ホームに入居させたのを冷たいと恨んで、アグリの智子への態度はすっかり硬化してしまった。

以来、アグリと智子の冷戦は続いたままになっていた。

「伯母がもう少し、大人になるまで無事で居てくれたら、アグリも変わっていたかもしれません。伯母が私に、家庭の味を知らないで育てている孫娘が不憫だ、といったことがありました。『元はといえば、私の身から出た鏝で母子二代を苦しめちゃって』とも伯母はっていました」

「アグリにそんな大事なお祖母ちゃんが居たなんて、知りませんでした。一度も話してくれた事はありません」

「そこが問題だとは思いませんか。話したくないんですね、私生児を生んだ人ということを知られるのが怖いし、母親が私生児だということも。母親を拒絶することとも何か関係があるんじゃないでしょうか。お祖母ちゃんは好きだが、したことは嫌いと否定している限り、母親の苦しみも理解できないんです。従姉の苦労も並大抵ではなかったんですし。こういうことは隠し立てしてセラピー受けてもダメですよ」

「セラピーは信頼関係が成立しないと効果がありません。患者が何でも話すようにならないとね。この話すごく参考になりました。いっぱい問題がありますが、一番先に突破しなければならないのは、お父さんとの関係ですね」

「えっ、お母さんとの関係が一番の問題かと思いましたが……」

「離婚の結果父親と一緒に住んでいないとか、父親と死別という『不在の父親』を持つ娘より、父親はいても、実質的には父親の役は果たしていない父親を持つアグリのような娘のほうが、感情面では遠く離れていて、辛くて大変で、心理的な問題をかかえるといわれているんです。こういうの『傍観者的父親』っていうんですが。こういう父親には、積極的で、社交的で、支配的な妻が居るパターンが多いんですよ。アグリのお母さんこういうタイプでしょ。こういう妻は、仕事の上での成功に欲求不満のはけ口を見出しますし、母親のこのエネルギーが娘にとっては凄いプレッシャーになって、苦しむんです。アグリの猛烈な母親への対抗意識はこういうことだろうと思います」

ゲイルは、彼女の専攻分野での解析を祐子にやさしく話した。さらにこういう環境で育った娘は、往々にして男性に背を向けて、仲間付き合いでも恋愛でも女性を求める傾向が見とめられると付け加えた。

「どの時期に、誰が、どうしていたら家族にこんな亀裂が入らなかったんだろう、と考えてみたことはあるんですが…。従姉にしても伯母にしても、必死で生きてきて……苦しみも隠しておくしか仕方のない時代だったのでしょうし。アグリは現代の精神医学のヘルプをいただいて、傷が癒せるようにと願っています。ゲイルさん、お願いしますね」

ライアン先生の指示で、2日後の朝7時の手術と決まったため、マンウトサイナイ病院へアグリは移された。

しばらくゲイルとだけにして欲しいというアグリの希望で、祐子は病室を出て病院のカフェテリアにコーヒーを飲み降りました。

「ゲイル、昨日は取り乱してごめん。卵子なんか売ったから、こんな事になったのかって考えていた」

「アグリ、非科学的なこと言わないの。あなたの筋腫は、多分高校生の頃からあったんじゃないかな。女性ホルモン不足が解消したこの一年足らずで、筋腫も急激に大きくなったらしいよ。今ごろ女性ホルモンが働き出すなんて、アグリは晩生（おくて）ね」

「卵子提供のこと、祐子おばさんに話しちゃった」

「ううん。こういうことは、あなた本人しか、話す権利はないもの」

「ありがとう。今後リチャードさんとどうすべきか考えていたの。永久に縁を切ったほうがいいか、それともむこうの言うように、ステファニーの育つのを一緒に見守るべきなのか」

「ステファニーのほかに、もう一人近い将来に生まれるわ。あなた自身で子供が生めないという事情に変わってきたんだから、リチャードさんの言うようにしておいたら。かえって有難い申し入れかもよ。でもタベみたいなことをいえば、あなたは永久追放です。」

「彼らのいうエクステンデッドウ・ファミリーね。血が繋がっていない人々でファミリーってというのが、このごろのアメリカでは多いものね。私の場合は、立派なファミリーか。私の遺伝子を持つ子だから。2人も子供がこの世に存在することになるのね。自分では産めなくなるのに」

お金が欲しかったから卵子を売った。でも、ホルモン剤をいっぱい使って不自然な排卵をさせたから、それが筋腫を急激に大きくしてしまったのだろうか。それとも男と遊び回ったからホルモンがいっぱい出ちゃったのだろうか。

どうして、あ那时的超音波検査に筋腫が引かからなかったのだろうか。卵巣だけの検査で、子宮は見えなかったのだろうか。

なぜ！ どうして！ という問いかけをアグリは自分にし続けた。

私は自分で自分の子宮を失うような自傷行為をしたという事になるのか？ いまさらのように自分のしたことに青ざめながら、アグリは手術の朝を迎えた。

病室で術前の準備を終え、ストレッチャーに移された。麻酔の前の強い鎮痛剤投与（アナルジア）で、頭がボーッとしてきた。すべての感覚が異次元のようだ。

祐子と憲郎、アグリが病室のドアの外で待ち、それぞれ手を握りしめて病人搬入のエレベーターまでついてきてくれた。

「アグリちゃん、がんばれよ」

と、まず憲郎がいった。

祐子は、黙って頬ずりをし、心の中で一神様、どうぞ、この子に子宮を残してやってーと祈り、必死で涙をこらえていた。

ゲイルは、エレベーターのドアがアグリのストレッチャーをほとんど隠したとき、突然「不幸が心を磨く」という言葉を思い出し、そうなることを祈った。

アグリは手術室に入り、ストレッチャーから手術台に移された。

ライアン先生が、洗浄した両手を胸の前に持ち上げて入ってきた。

「ドクター、子宮が無くなったら、ピリオド（生理）はもうこないんですね」

と、聞いているつもりだったが、何か思うように舌がまわっていない。

麻酔医の麻酔開始という声がしたようだ。

ああ、もうあのひどい出血に悩まされないでいいのだなと思いつつ、しかし、ピリオドがこない女は女だろうか、と最後の意志を奮い起こし考えていた。

突然、手術台を照らす无影燈の輪の中に、丸いものが幾つか動き出した。丸い球形の中になにかいる。

—ああっ、私のフローズン・エッグ！ いいえ、8つのエンブリオだわ—

ヒト—オツ、

フター—アツ、

ミツツ………

アグリの意識は消えていった。

完

フローズン・エッグ

<http://p.booklog.jp/book/79896>

著者：天海結月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shibaskie/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79896>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79896>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ